

東日本の大災害に想う

財団法人大阪科学技術センター
ATAC 運営委員長 梶原孝生

東日本を襲った地震と巨大津波。さらに追い打ちをかけるかのような福島第1原子力発電所のメルトダウンにも追い込まれた事故。我が国は太平洋戦争の敗戦にも重なるような大打撃の事態ですが、その復興を世界が見守っています。

東日本の企業の被害が、我が国の産業に及ぼした打撃は既にご存じの通りです。関西の企業でも、その資材調達の困難や出荷停止の状況に大きな痛手を受けていることが生じていると聞いております。

さらに今後、電力不足の問題で、生産に大きな痛手を受けることも想定を余儀なくされています。

翻って考えてみますと、我々が知る関西の企業は、17年前に阪神大震災を経験し、そこから見事に復興してきた貴重な経験をもっております。

今回もこの阪神大震災の経験を生かしての取り組みが各所で見られています。6月度の経済短観では、企業での大きな打撃が報告されていますが、その一方で、予想以上の早さで産業界の復興による経済回復も認められています。

今回のこの復興で大きな戦力になったのは、中小企業が東日本のみでなく、日本中が応援してお互いのネットワークを生かして応援し、生産の打撃をお互いが補完し合って復旧に力を発揮したことが伝えられています。これこそが我が国が世界に誇れる民族性というか、日本人の魂の根幹ではないでしょうか。

政治の混迷をよそに、必死の覚悟で復興の槌音を響かせている被災地の企業、それを支える周囲のネットワークには頭が下がります。モノ造りに従事する我々も、このネットワークに貢献できることを捜して、少しでも寄与したいものです。

話とはかわりますが、天災に始まって人災をも含めて、今回のこの大災害は、視点を変えれば、また、新たなビジネスチャンスをもたらすものでもありません。

太陽光発電などの自然エネルギー利用、省エネルギー化をもたらす技術、装置、用具、防災関連、弱者保護、ことに介護関連などなど、必要とされる新技術の導入はいまこそ拍車をかけて取り組む課題ではないでしょうか。

私はかつて学生時代に、卒業間近にして肺結核で療養所に2年入り、大きな挫折を感じたものでした。しかし、このとき、座右の銘というか格言というか、いつも心の中で叫んでいたのが以下の言葉です。

『人生、至る所に青山あり』

『転んでもタダでは起きない』

そして鶴の目鷹の目でこの格言を実行しようと熟考し、療養生活を送ったことを思い出します。

放射線測定器の小型化、低コスト化、簡便さ、測定精度の向上など、中小企業の知恵が活かされる場は大いに期待されています。また、実際の災害現場に学ぶことで色々な新たなニーズを掘り起こすことが至る所で可能でしょう。

この大災害を一つの契機として新たな発展の出発点として捉えることも忘れないようにして欲しいと思います。

また、関西の中小企業も今こそ危機管理、BCPを見直すチャンスでもあります。東日本の企業では、従業員の連絡、確認、貴重な資料の消失に対するバックアップ、復興の手順など、BCPの重要性が叫ばれています。BCPの構築に向けてATACがお手伝いしますので、ご遠慮なく声をかけて下さい。